



崇城大学

被災からパワーアップ 2施設再建 英語学習施設などの機能を拡充

シルク 「SILC」がリニューアルオープン

熊本県を代表する私大の一つ、崇城大学（熊本市）は、工学部、情報学部、生物生命学部、芸術学部、薬学部の5学部10学科と大学院からなり、昨年、開学50周年を迎えた。熊本市西区の池田キャンパスと、熊本県益城町の熊本空港に隣接する空港キャンパスで、3500人を超



中山峰男学長

える学生が学んでいる。うち空港キャンパスは、工学部宇宙航空システム工学科が取り組むエアラインパイロットの養成の拠点で、これは全国でも類を見ない同大の特色となっている。

一方の池田キャンパスでは、熊本地震からの復旧・復興が進んでいる。キャンパス内の複数の建物が被災したが、同大はこれを機に、二つの拠点施設の全面的な建て替えを計画。ことし4月、その一つである英語学習施設「SILC（SOJO International Learning Center）」が、復活を果たした。

SILCは、英語習得の重要性を説く中山峰男学長肝いりの施設で、外国人講師が17人配置されるなど、海外に留学したかのような環境が提供されている。全学科で1～2年次に必修科目となる英語の授業はSILCで行い、学生は学部に関係なく自由に出

入りでき、講師と英語でコミュニケーションしながら生きた英語を学べる。

昨年12月、同大の学生が「第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」で最優秀賞（文部科学大臣賞）を受賞し、出場127校の頂点に立つという快挙を成し遂げたが、これはSILCと同大のもう一つの特色である起業家教育との相乗効果によってもたらされたと言える。

再建によって、存在感を増すSILCの機能がさらに拡充された。建物は3階建てから4階建てとなり、1階には、開放的な「SILC CAFE」をオープン。自律学修センター「SALC（Self-Access Learning Center）」など従来からの設備も含め、その拠点性が高まった。

新D号館はアクティビティー拠点

また、池田キャンパスの中心に位置するD号館も大きく変貌する。全面的な建て替えて、ガラス窓に覆われた半円形の3階建ての新D号館を建設。被災前は実験・実習の施設だったが、明るく洗練された雰囲気が印象的な、学生のアクティビティー（さまざまな活動）の拠点となる。1階は入

り口が4カ所ある開放的なフードコート、2階はグループワークやディスカッション、体験学習などアクティブ・ラーニングのフロアで、3階は832人収容の大講義室。8月の完工をめぐり工事が進んでいる。

被災から立ち上がり熊本県が掲げる「創造的復興」を形にしている同大だが、取り組みはこれにとどまらない。ことし3月には芸術学部のデザイン学科の学生たちが「震災後の熊本に元気を」と銘打ち「みらいデザイン Kumamoto Vol.2」を地元の鶴屋百貨店で開催。14チームが「熊本が元気になるデザイン」を展示し、注目を集めた。

これは取り組みの一例で、これ以外にも同大の学生たちは、地域と連携したさまざまなプロジェクトを動かしている。中山学長が提唱する「学生の心に火を付ける教育」が、熊本を元気にし、大いに活性化させている。



SILCでは、豊富な英語教材を使い「聞く、読む、書く、話す」という英語の4技能を磨く